

令和8年度 函館市医療・介護・障がい福祉連携 「施設看取り研修会」

テーマ：「施設看取りの不安・気づき・そして今」
～つながるケア～

特別養護老人ホーム ももハウス



ももハウスの施設概要



従来型特養 (平成9年設立 築29年)



定員70名 (入所60名+ショート10名)



平均介護度4.3



多床室中心 (4人部屋7室、2人部屋12室、個室18室)

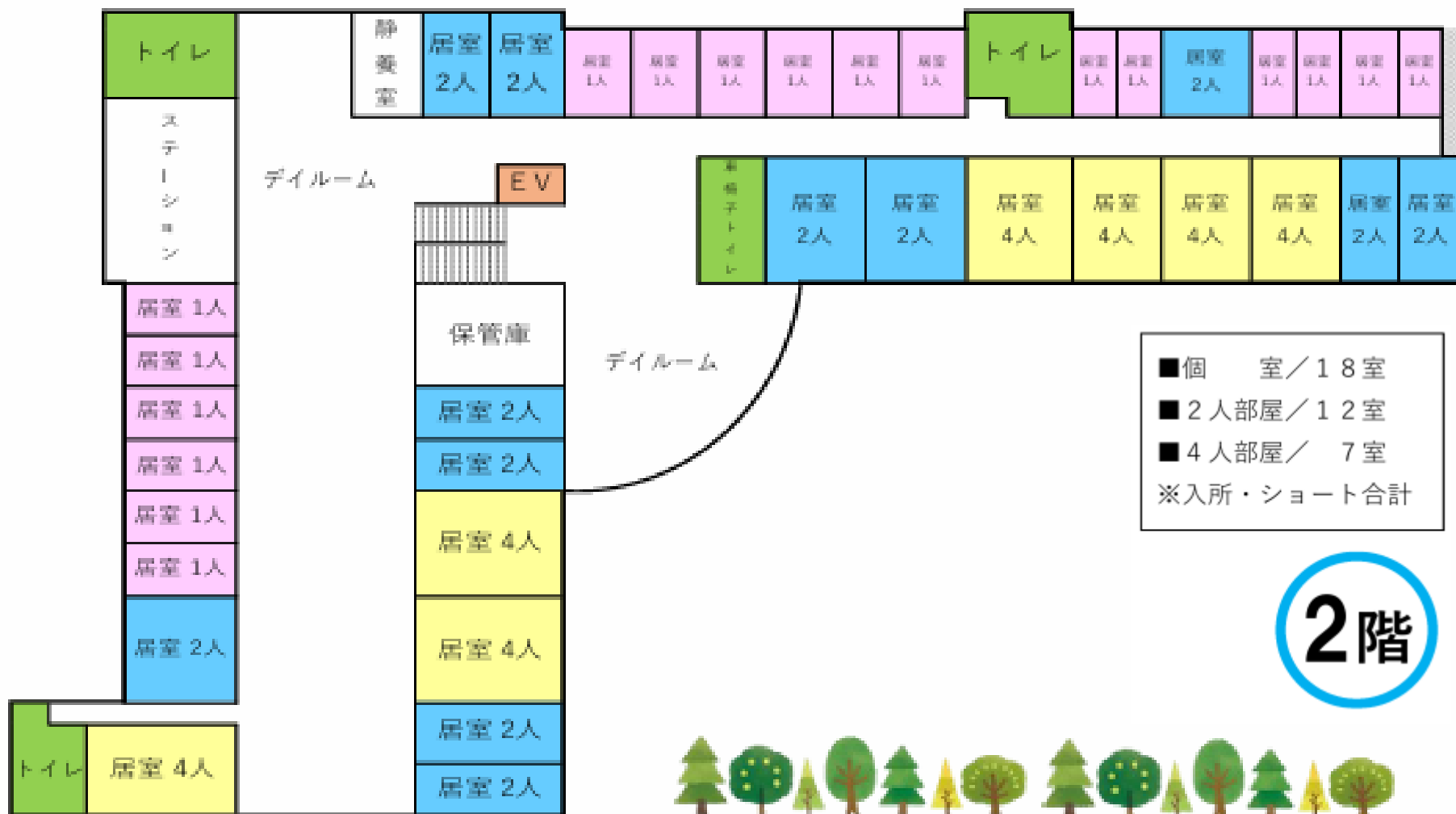


介護職員33名 (常勤・非常勤・派遣・技能実習生6名含む)



看護職員5名

ももハウスの施設概要



これまでの歩み

導入期



平成29年～

- 看取り介護加算取得に向けた準備開始
(委員会設置、指針・マニュアル作成、同意書等整備)



平成31年、令和元年

- 看取り介護加算取得

実績 (平成31年4月～令和8年3月)

	退所者数	146名
	看取り介護実施	87名
	看取り率	約60%

当初の課題

看取り介護導入当初の課題

1 職員間の 共通認識不足



- ✓ 看取り開始までのプロセスが曖昧
- ✓ 急変時の対応
- ✓ 家族へ説明する役割

2 職員間の 連携不足



- ✓ スキントラブルの発生
- ✓ 離床や入浴の判断がまちまち
- ✓ 「もっとなにかできたのでは」という後悔

3 ご家族との 情報共有



- ✓ 状態認識の違い
- ✓ 来設連絡のタイミング
- ✓ 意向変化への対応

質向上に向けた取り組み

委員会を中心に施設全体で改善に取り組んだ

1



多職種連携

- ✓ 看取り開始時と看取り後のカンファレンスの開催
- ✓ 記録の充実と情報共有

2



利用者理解の充実

- ✓ 入所時の生活歴・価値観の聞き取り
- ✓ 好きな食べ物や音楽など

3



家族支援の強化

- ✓ 早期からの意思決定支援
- ✓ こまめな状態報告

4



施設全体の取り組み

- ✓ 事業計画への位置付け
- ✓ 事業計画説明会で全職員と確認

質向上に向けた取り組み

・看取り介護の充実（事業計画説明会）



「ご遺体はケアの成績表」

最後のお姿に、変色や傷、口腔内の汚れが目立つようでは、本当に安楽な状態で過ごせていたとは言えない。どうすれば、その方が最後の時を穏やかに、そしてきれいな状態で迎えられることが出来るか。

（スキンケア・口腔ケア・日常の整容ケア）



「素敵なエピソードをどれだけ残せるか」

ご家族へ、故人の施設での生活についてお伝えする際、「大変だったこと」や「困ったこと」だけではなく、その方らしい表情や、穏やかに過ごされていた様子など、ご家族が安心できるような温かいエピソードを、どれだけ職員一人ひとりが残すことが出来るか。

（日頃の関り・認知症ケア・情報共有）

看取り介護の流れ



各段階のポイント

1 入所申し込み ☐ 特養の医療体制を説明（医師は常駐ではない、夜間は看護師不在）

相談員

2 入所時説明 ☐ 看取り介護について説明
☐ 本人・家族の意向確認（終末期の希望、延命治療の希望）

看護師
ケアマネ

3 日常的な状態共有 ☐ 体調変化時の連絡
☐ 面会時の状態報告
☐ 意向の変化確認

介護、看護、相談、
ケアマネ

4 看取り移行の判断 ☐ 医師・看護師による説明
☐ 同意取得
☐ 看取りカンファレンス開催、看取り介護計画作成

医師、看護師

ケアマネ

5 看取り介護開始 ☐ 状態変化の共有
☐ 家族との連絡強化
☐ 面会機会の調整

全職種

看護師、ケアマネ、相談

6 お看取り ☐ 家族へ連絡
☐ 嘱託医による死亡確認
☐ エンゼルケア
☐ 看取り終了後カンファレンス開催

医師、看護師

全職種



看取り介護の
質向上に向けた取り組み

当施設が重視していること

- ✓ 「家族への早期からの意思決定支援と継続的な情報交換」
- ✓ 「記録の充実による情報共有・多職種連携」

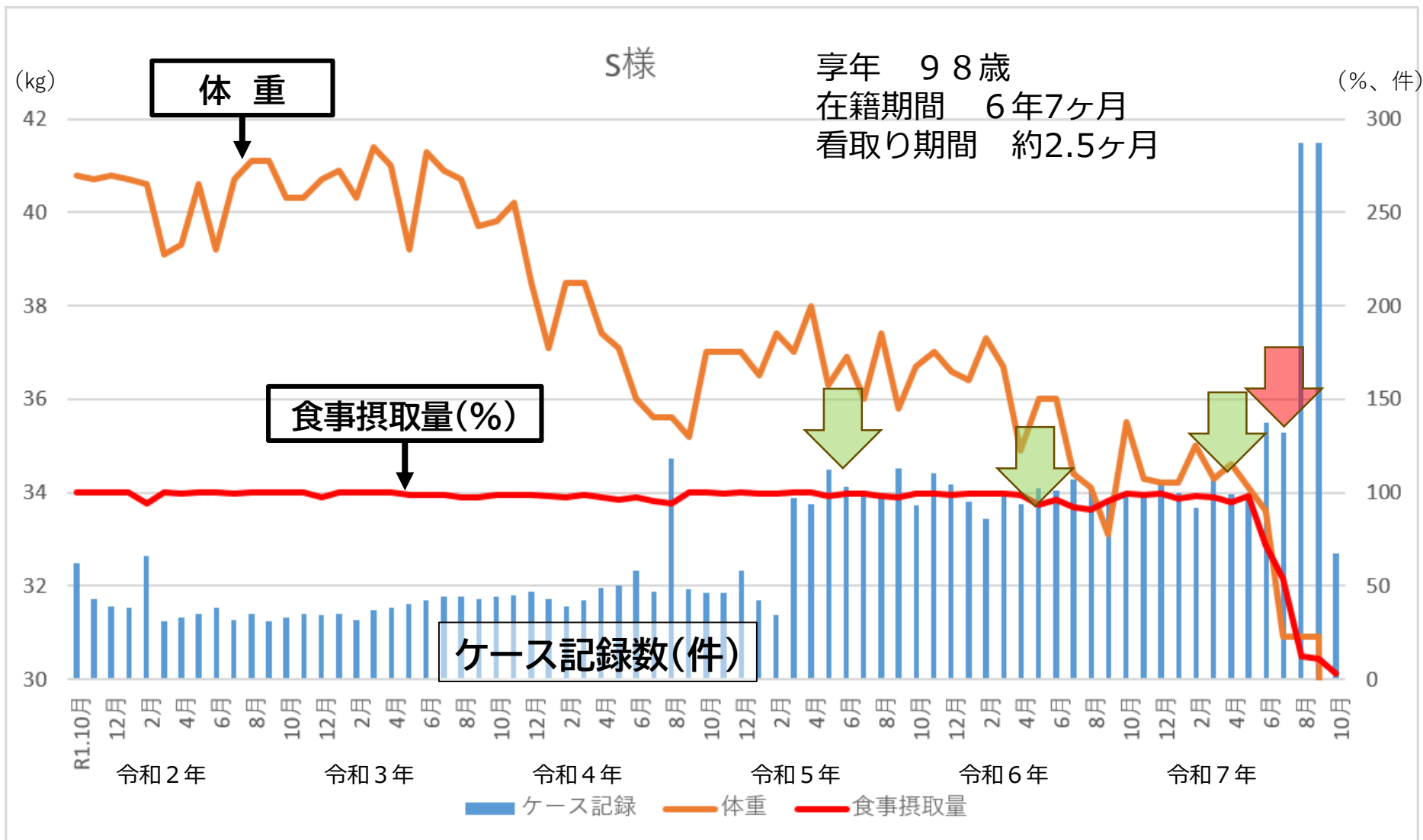
看取り介護の流れ

看取り介護の質を高めるのは、
多職種それぞれが持つ知識や技術だけではなく、

**「情報を共有し
お互いの視点を理解し合う組織文化」**

ではないだろうか。

事例紹介



職員アンケート結果

職員アンケートから見た看取り介護の現状

！ 課題

- ご家族の不安や葛藤への精神的支援
- 状態変化に応じた対応の共有
- 各職種の視点や実戦経験の共有
- 身体状況だけでなく、その人らしさや人生歴の共有



? 不安

- ご家族対応（説明・寄り添い）
- 状態変化に伴う判断の難しさ
- ご本人の気持ちを十分に
くみ取れているか
- 夜間帯の急変対応や見守り



📖 学び

- 苦痛の少ないケアの重要性
- 本人の価値観や人生歴を知ることの大切さ
- 「その人らしい最期」を支える視点
- 一つひとつのケアを丁寧に行う意識



❤️ やりがい

- ご家族からの感謝の言葉
- ご本人の穏やかな表情や反応
- 好きな食べ物や音楽など希望の実現
- 「この施設で良かった」と言っていたこと



考 察

- ▶ 職員は看取り介護に不安や葛藤を抱えながらも、**多職種で連携し**、ご本人・ご家族に寄り添うことの重要性を学んでいた。
- ▶ 看取り介護の経験を重ねることで、職員の視点は「**最期を看取る**」から「**その人らしい人生を支える**」へと変化していた。



今後の課題



近年、退所者数の増加と平均在籍年数の短縮が進み、看取り介護を取り巻く環境も変化している

1

短期間での
意思決定支援



- ✓ 本人意思確認の限界
- ✓ 家族の迷いや揺れへの支援
- ✓ 入所早期からの 意思確認の充実

2

限られた時間の中での
個別ケア



- ✓ 利用者理解の時間不足
- ✓ 関わりの希薄化への対応
- ✓ 「その人らしさ」を支える看取り介護の追求

3

看取り件数増加に伴う
職員支援



- ✓ 職員の心理的負担への配慮
- ✓ 「もっとできたのではないか」という葛藤への支援
- ✓ 慣れによる感受性低下の可能性



多職種連携と家族との継続的な意思決定支援を基盤に、
一人ひとりに寄り添った看取り介護を目指していく。

まとめ

～ 不安や課題と向き合いながら、より良い看取り介護を目指して ～

1



課題の多さを認識することから始まった

当時、手探りの中で導入した看取り介護は、多くの課題が出現し、現場は大きな戸惑いと混乱の中にありました。

2



委員会活動や多職種連携を通じて改善を重ねてきた

看取り介護の充実を事業計画に位置付け、仕組みづくりや記録の充実など、多職種の連携を意識しながら改善を進めてきました。

3



家族との継続的な意思決定支援と記録による情報共有を重視する

その人らしい最期を支えるために、ご本人やご家族の思いを丁寧に確認し、多職種で共有しながら支援を行っています。

4



職員アンケートから課題と成長が見えた

現在も不安や難しさは残っていますが、職員の回答からは学びや成長、そして看取り介護に対する意識の変化がうかがえました。一方で、新たな課題も明らかになりました。

5



今後も利用者・家族に寄り添った看取り介護の実践を継続していきたい

近年は退所者数の増加や平均在籍年数の短縮など、看取り介護の重要性はさらに高まっています。しかし、その実践には多くの悩みや課題が伴います。



「いつでも安らぎを」～その瞬間を迎えるまで～

これからも職員一人ひとりが学び続け、多職種で支え合いながら、ご利用者とご家族に寄り添った看取り介護を積み重ねていきたいと考えています。



♡ 不安や課題と向き合いながら、これからも「つながるケア」を大切にしていきます。♡